



第21号  
2010年春



Pallium 【パリアン】

パリアンは医療・看護・ボランティア・心のケアのグループで、在宅ホスピスケアを行っています。

# パリアン通信

発行：グループ・パリアン 東京都墨田区緑 1-14-4 両国 TY ビル 5 階 TEL 03-5669-8302 FAX 03-5669-8310 <http://www.pallium.co.jp/>

\*\*\* パリアンの語源は、ラテン語の pallium から拝借しました。暖かくひとを包みこむマントやコートのことを意味します。\*\*\*

目次	パリアン医師より	・・・1	在宅ホスピスに魅せられて	・・・2
	ボランティア研修報告	・・・2~3	ご遺族からのお便り	・・・4

## 在宅がん患者に、高品質な緩和ケアを効率よく迅速に届けるために必要なこと

－ 緩和ケア診療所(PCC)を中心とした、地域連携NWシステムの構築 － 川越厚 (パリアン理事長、クリニック川越・院長)

末期がん患者や家族の QOL (quality of life) から見て、高品質のケアさえ保障されていれば在宅はベストの場である。その信念のもと、国はこれまで様々な制度整備を行い、インセンティブをつけて在宅医療の推進を図ってきた。一方、病院機能の厳密化、それにリンクした病床数削減、在院日数の短縮が不可避であるとするならば、それは在宅医療の更なる充実という前提があつてのことである。たしかに家族介護力の弱体化の中で、在宅ケアの実践そのものが困難となっていることは否定できない。しかしサービス提供主体の我々がこの問題を考える時、医療者の熱意、意欲だけでなく、新しい時代にマッチした在宅医療の供給の在り方が問われているのも事実である。

### 1. 疾患特性に基づいた在宅患者の分類と専門性

現在、在宅医療はひとまとめにして論じられているが、在宅で質の高い医療を効率よく提供するためには、臨床特性に基づいた疾患分類を行い、それぞれにふさわしいサービス供給体制を構築する必要がある。ここで問題となる臨床特性とは 症状の安定性 医療依存度

在宅期間である。末期がん患者は医療依存度が高く、死までの期間(平均、約50日)が大変短いので、高品質のケアを提供するためには、専門的な知識と技術を持った医療者がチームとして関わる必要がある。

### 2. 「寄せ集めのチーム」ではなく、「一体化したチーム」でケアにあたる

末期がん患者に対する在宅医療は、死という結末が見え、短期間に終了する制約の中で、急速に悪化する身

体状況と向き合い、全人的な苦しみを緩和するものでなければならない。そのようなケアは、その患者のため新たにするチームにより提供されるのが一般的である。しかし、末期がん患者の臨床特性を考えれば、チーム内の迅速な情報授受はもとより、ケアの哲学、具体的なケアのやり方などをチーム内であらかじめしっかりと共有することが重要である。「寄せ集めのチーム」ではなく、「一体化したチーム」がケアに関わるべきだと、私は考えている。

### 3. 緩和ケア診療所 (Palliative care clinic、仮称) の新設に向けて

地域において高品質のケアを遍く提供するためには、ホスピス・緩和ケアを提供する専門的な診療所 (PCC と略す) を制度化し、PCC を中心とした地域ネットを構築する必要がある。PCC の施設基準として、私は以下のようなことを考えている。1) 在宅療養支援診療所であること 2) 一定数以上のがん在宅死、在宅死率の実績があること 3) 一定レベル以上の医療を提供すること 4) 特定の訪問看護機関と一体となったチーム体制をとり、統合したサービスを提供すること、などである。PCC のその他の役割と機能として、在宅緩和医療に関する研修、教育、ボランティアの育成、地域に向けての情報発信、計画的な遺族ケアなどが挙げられる。

PCC を中心とした在宅医療のネットワークが構築された暁には、末期がんになっても住み慣れた地域で、安心して納得のいく人生を全うしたいという、多くの国民の夢が実現すると私は信じている。



## 在宅ホスピスケアに魅せられて

看護師 山崎美恵

私はパリアンに入職し3月で早1年を迎えます。以前は札幌で7年半程訪問看護をしていました。その当時私が担当していた医療不信の強い卵巣がん末期の方がいたのですが、その方は最期まで家にいたいという意味があったにもかかわらず病院で迎える結果になりました。今でも思い起こすと心苦しい気持ちで一杯になりますが、パリアンで過ごした1年間を振り返りながら思うと原因はチームケアが不足していたのだと気づかされました。ご本人やご家族が満足される看取りは決して看護師一人ではできませんし、もちろん医師だけでも難しいことです。今の時代は、独居の方の看取りも増えてきており、更に医療者だけでは難しく、ケアマネジャー（以下CM）やヘルパー、ボランティアなどの様々な職種のサポートがなくてはならないのが在宅ホスピスケアです。また病院から在宅へ帰る際に院内の地域医療連携室等からCMにはつなげてくれても医療者にはつながらず、私たちの所へ来られた際には病状が進行しかかなりの苦痛をかかえていたり、ご家族が病院から捨てられたという思いでどうしてよいのか途方に暮れ、自ら捜して来

たというケースも珍しくありません。やはり、介護も医療も両方の目が必要で患者・家族の生活を支えながらケアしていかなければいけません。本当に在宅ホスピスケアは奥深く噛めば噛むほど味があり（するめ？）やめられないとまらない（かっぱえびせん？）看護で、大変か大変じゃないかと問われると自分を試される看護でもあるし大変・・・かもしれません。しかし、そんな一言では終わらせられない程自分に返ってくるものが沢山あります。そして在宅ホスピスケアほど人間の自然なケアの源ではないかと思っています。先日ある学会で施設の看護師のコミュニケーションスキルの話の中で患者さんへ意識しないと出来ない会話という内容がありました。在宅では自然に会話ができるかな・・・と思いながら聞いていました。それこそ在宅ホスピスケアがその人の暮らしの中にあり、人生の集大成の時にあるからこそ自然にその時を迎えられるように私たちが支えていかなければいけません。そう出来る為にも自己研鑽し続けたいと思っています。



## ホスピスハワイボランティア研修報告

今年2月10日～16日の日程で、パリアンのスタッフとボランティア総勢14名が、オアフ島にあるホスピスハワイで研修を受けてきました。ホスピスハワイはパリアンと姉妹提携を結んでいる施設です。

### WOUNDED HEALER（傷を持った癒し手）

ボランティア 野本ちさと

ホスピスハワイ研修で私が学んだのは「死にゆく患者に何をしてあげられるのか」という問いへの答えは自分の心の中にある」ということだった。ホスピスハワイのチャプレンであるクレランスの話の中に「完璧な人はいない。人は誰でも傷を持っている。傷を持っているからこそ人に手を差し伸べることができる」という言葉があった。ボランティアをするにあたっては自分自身と真摯に向き合うことが必要である。自分はどのような人間であるのか、なぜボランティアをしたいのかを真剣に問いかけ、傷を持った自分が今目の前にいる患者に何が出来るのかは自分で見つけなければならない。

今回の研修で出会った人たちは皆明るく穏やかでしかもユーモアに溢れていた。スタッフの方たちは訪問した

私たちを同じ信念を持って終末期医療に取り組む仲間として迎えて下さっているように感じたとし、経験を話して下さったボランティアの方たちからは静かながら熱い思いが伝わってきた。エイズ患者の方への最後の訪問の話、ホームレスだった患者の話などは忘れることができないと思う。



家に帰ってから改めて、いただいた資料を読んでみた。その中で引用されていた作家のバーナード・ショーの言葉が胸に響く。『人生は私にとってすぐに燃え尽きてしまう単なるろうそくではない。言うならばこの手に握りしめた輝くトーチであり、次の世代に手渡すまで、できる限り明るく燃やし続けたい』

パリアンケアチームの一員としてかけがえのない命に寄り添い活動できることに今改めて感謝している。



### ハワイ研修で学んだこと

ボランティア 有富洋子

あらかじめ読んでいったケンさんの講演記録の中に「我々としては、ボランティアをプロフェッショナル、専門家として見ている」ということがあった。このことについて、この度の研修から理解することができた。また組織として必要な人材を育てる、ボランティアはなくてはならぬチームメンバーという考えの強さをあらためて感じた。ボランティアコーディネーターとチャプレンの存在がボランティアの教育と維持に大きくかかわっていた。

訪問ボランティアの養成に特化したボランティア教育は、「死にゆく人に向き合う人を育てる」その一点に絞られていた。座学では、守秘義務の徹底、自分の死について向き合い考えさせる、自分の感情を表現して心を開き、そして人の心の声にも耳を澄ますなどのコミュニケーションの訓練などがプログラムされている。チャプレンの

クラレンスさんの言葉「ボランティアは死にゆく患者さんを温かく包み込む心が何よりも大切。How to do ではなくて How to be である」に、大いに共感した。だから、養成教育はもっともそのことを大事にすると話されていた。

コーディネーターのジェニファーから、訪問ボランティアの同意書を見せてもらった。それによると、守秘義務のこと、少なくとも週 4 時間は訪問活動をする、訪問の指示を受けたら 8 時間以内には動く、月一回の記録の提出、不在の時などコーディネーターに届け出るなどの内容がある。これを、毎年契約にするようだ。二人のボランティアの話や、この契約書を見て、これこそ当てることになるボランティアであるし、ケンさんがいう「プロフェッショナルなボランティア」であると思った。

ボランティア活動は訪問ばかりでなく、アートやマッサージなどの専門技術に関連したこと、事務、コンピュータ関係、ケアハウスの細々とした仕事など多岐にわたるようだった。ホスピスハワイの活動を、様々なボランティアが支えている、またアメリカではそれが必須とされていることも伺えた。

青い空、美しい海、毎日のようにかかる虹、青々茂る南国の木々等々、これぞハワイの空気にも多少触れることができた。でも何よりも、ケンさんをはじめホスピスハワイの人たちの心からのおもてなしに触れることができたことに深く感謝したい。また、このような研修の機会を作ってくださったパリアンにも心から感謝している。



### ホスピスハワイからのメッセージ



研修に参加された 14 人の皆さんが無事に日本に戻られたとお聞きして安心しました。

川越先生や博美先生を始め皆さんがホスピスハワイへ来てくださったこと、研修ができたことをとても光栄に思います。また近々このような機会があることを願っています。ホスピスハワイのボランティアプログラムも常に変化しています。パリアンのボランティア組織づくりのために私達が少しでもお役に立てればと思っています。皆さんのことは忘れません。いつか私も日本へ行って皆さんにまたお会いしたいです。（日本に行かれるように頑張ってお話を説得します！）アロハ 海の彼方より

ジェニファー・マヌより（ホスピスハワイ・ボランティアコーディネーター）



私も皆さんと楽しいひと時を過ごすことができました。私達の OHANA（家族）の心を感じて下さり、とても嬉しく思います。また近々パリアンの皆様にお会いできることを楽しみにしています。

アロハを込めてケン・ゼリー（ホスピスハワイ代表）



## ご遺族からのお便り



師走の忙しい時期に、パリアンの門を叩かせていただきました。月一度の大学病院への通院は半日がかりで苦痛を伴い限界でした。翌日、川越先生は母の病気からどんな人生を歩いてきたのか、家族構成から全てを聞いて下さいました。母を人間として心をもって見て下さるのだと思いました。もう私は肩に乗っていた重い荷物をみなさんが支えて下さるようになって、説明の後「こんな場所があったなんて、もっと早く知りたかったです」と涙がこぼれそうでした。母は先生をとっても気に入って「いい先生に会えてうれしい。本当ありがたい。」と私と同じ感想を言ってくれました。

翌日から看護師が来て下さいました。強がって母が事実と違い「歩けるしお風呂も一人で入れる」という話をしても相槌をうち、話に聞き入ってくれる姿に心をうたれました。「母との最期の時を大切にしなければ」とあらためて教えられました。

この病気の最後は坂を転げ落ちるように悪くなります。

今日食べられても明日は食べられなくなることもあります。

今日話せても明日は話せなくなることがあります。

最後は突然やってきます。いつも今日が最期だと思って接すること。

その日からいつか最期となっても悔いのないよう行動できました。この言葉をちゃんと聞いていなければ年末の忙しさをつい優先し、一生の後悔が残ったと思います。櫻井さんには母の最後となったお風呂へ入れていただき、大変お世話になりました。久しぶりだったので母は「ここまで私も弱っていたとは思わなかったし、一人じゃ入れなかった。ありがたいわ。本当気持ちよかった。恥ずかしいくらい垢もでて、でもすっきりしたわ。」と何度も感激してお礼を言っていました。夕方にまたお電話でその後の体調を心配して頂きました。

母は最初恥ずかしさもありませんお風呂も拒んでいましたが、みなさまに心を動かされたのだと思います。みなさんの志をもった誠実な対応が伝わってきました。私には天使のように見えました。いつも的確な一言を下さり、この一週間の私を支えてくれました。

田實先生と父と弟がお会いすることができ、直接お話を聞き心を動かされたようです。「ホスピスも予約は入れておいたほうがよいのでは」と揺れていた心が、お話を聞いて安心し、最期までみんなで頑張ってみようと家族の心がひとつになることができました。最期となった夜、みんなで泊り込んでいたので母の手を握り、「ありがとう。もう眠って休んでいいよ。よくがんばったね。」と各々言葉をかけて看取ることができました。とても苦しまずキレイな顔でした。お葬式でも「いいお顔してたわ、いい最期だったことが表れていたよ」と言って頂けました。亡くなった後、母の手紙が見つかりました。

「私の臨終にあたっては苦痛の伴わない処置をお願いします。くれぐれも過剰な延命策は用いないで頂きたいとお願い申し上げます」とだけありました。

やはり母の望むかたちで逝けたのではないかなと思いました。もしホスピスに入院していたら、今年は新型インフルエンザがあったので子供(孫)は面会も許されなかったと思います。いつもの部屋で、孫の声を聞きながら逝けて母も幸せだったと思っています。残念なのはせっかく出会えた素晴らしい皆様のとのかかわりがあまりにも短かったことです。父をはじめ家族より、母に代わり感謝御礼を申し上げます。陰ながら皆様のこれからの更なるご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

(2009年12月にご逝去された方のご家族より)



## お知らせ

### 第6回ヘルシー・ソサエティ賞受賞

川越厚院長・川越博美看護部長夫妻が平成21年度第6回ヘルシー・ソサエティ賞を医療従事者部門で頂きました。

この賞は、よりよい明日に向け健全は社会と地域社会の幸せを願い、国民のクオリティ・オブ・ライフの向上に貢献した人々を称える目的で、社団法人日本看護協会とジョンソン・エンド・ジョンソングループによって創設されたものです。

